

幼児の身体表現におけるイメージと動きの相互作用

—題材と言葉がけの違いの視点から—

鈴木裕子

I 研究目的

幼児期の身体表現は、子どもたちが自分の感性や知性を活かしてイメージを膨らませ、自分のからだを使って動きを工夫し、表現する喜びを味わうことにねらいがある。また、身体表現の特性として、イメージと運動の融合¹⁾が創造の過程を支えるとされる。

幼児の表現活動を援助する方法として、イメージを膨らませるための言葉がけの必要性は様々な研究で認められており、実際、幼児が、保育者の言葉がけに触発され身体表現していく場面も多くみられる。保育者の言葉がけは、表現への意欲や進み具合に大きく影響する。言葉がけは、身体表現の特性からすれば、子ども一人ひとりが、動きを工夫するための援助になることが必要である。

しかし実際には、表現させようとする対象の属性や状況を説明したり、あるいは知識的な分析に終止してしまう言葉がけが多く行われているように思われる。身体表現でのイメージは、動きの質を通して語りかけるもので、決して言語や説明的な身振りに変えられるべきものではない。従って、動きの言語の最もよく表現できる性質のみを抽象化することによって、子ども達は、生き生きとした状態のなかに自分自身を創造することができるのである²⁾。

また一方で、幼児期の子ども達の特徴として、表現に先立つイメージづくりで、それほど難渋することはないとされ、むしろ具体的なものを手がかりにして、そこからイメージをこしらえていく傾向が大人より強く、イメージがそれほど明確に意識されなくても、活動のなかでそれを意識していくことができると言われる³⁾。

以上の点から、身体表現活動での保育者の援助は、もっとからだや動きという点を意識させる方向に向いてもよいのではないかと考えられる。

イメージを動きにする過程で、試し、確かめ、修正し、自分の経験に基づくイメージを湧かせ、はっきりさせていくという相互作用の過程こそが、身体表現の楽しさである。子ども達に、象や蝶々の動きを覚えさせることが目的なのではない。自分のからだや動きで動物や物の動きを探究することは、質的な感覚から様々な対象を捉え思考することである。それは、ひいては現在の子どもたちに希薄といわれる「身体的な想起」⁴⁾を経験させていく機会になると考える。

そこで、本研究では、幼児期の身体表現におけるイメージと動きの相互作用を促す方法を検討する手がかりとして、まず、題材や言葉がけの違いによって表現がどのように異なっているのかを知るための実験を試みた。

II 研究方法

①対象

対象は、名古屋柳城短期大学付属豊田幼稚園5歳児30名(男児15名・女児15名)であった。各クラスより月齢のバランスを考慮して10名を抽出した。

②題材と言葉がけ

身体表現のテーマは、「動物のいるジャングルへ探検に行こう」であり、そのテーマのなかに6つの題材を設定した。題材は、幼児にとって身近だと考えられることと、運動の性質が異なるものという観点から「探検隊」「暗くて狭い道」「象」「うさぎ」「へび」「ヘリコプター」の6種類とした。

さらに、同一のテーマと題材について、2種類の異なる言葉がけによる刺激で身体表現させた。

刺激としての言葉がけAは、イメージの内容を強調した言葉がけであり、言葉がけBは、動きの要素を強調した言葉がけである。題材と言葉がけの詳細は表1のようである。言葉がけは、予めテープレコーダーに録音したものを使用した。

幼児の身体表現におけるイメージと動きの相互作用

また、録音の際、どちらの言葉がけについても、同一の刺激音を挿入した。6つの題材を合せた表現時間は、2つの言葉がけ刺激ともに4分間である。

③実験の手順

日時：1999年7月

場所：名古屋柳城短期大学附属豊田幼稚園の遊戯室

手続き：言葉がけAと言葉がけBのどちらの刺激を先に行うかで身体表現の結果が変わる可能性が

あるので、1回目（7月8日）と2回目（7月16日）は順序を逆にして行った。対象とする幼児は、各クラス10名としたが、できるだけ日常の保育活動と同じ状況でないとならな表現にならないと担当保育者との討議から判断し、1クラス（30名程度）単位で行った。探検隊や動物の様子を話し合った後、「探検隊の隊長の命令（テープの声）をよく聞いてやってみましょう」と要領が理解できるように説明し、簡単な練習をした後、本調査と

表1 題材と言葉がけの内容

「動物のいるジャングルに探検に行こう」		A イメージの内容を強調した言葉がけ	B 動きの要素を強調した言葉がけ
題材	主な運動	さあ みんな 今日は動物のいるジャングルに探検に行こう 私が この探検隊の隊長だ みんな 私の言うことをよく聞くんぞ いいかー よーし 元気な返事だ	
①探検隊	人が歩く	さあ、探検隊出発だ ここは ジャングルのなかの道だ 僕達 私達 元気な探検隊 1 2 1 2 勇気を出して進むんだ 1 2 1 2 何がきあってへっちゃらだい 1 2 1 2 僕達、私達、元気な探検隊 1 2 1 2	さあ、探検隊、 前を向いて、足を高く上げて出発だ ここは、ジャングルのなかの道だ 僕達 私達 足を高く上げて 腕を振って1 2 1 2 胸をはって 前をみて1 2 1 2
②狭くて暗い道	人が這って進む	やや 困った 道がないぞ ここに小さな穴がある この中を進むんだ これは狭いなー 真っ暗だぞ そーっとそーっと進むんだ 狭いなー 暗いなー	やや 困った 道がないぞ ここに 小さな穴がある この中を這っていくしかない できるだけからだを小さくして 頭をぶつけないように 手で地面を触って 頭を下げて 這っていくんだ 小さくなって 小さくなって
③象	象の形態や動き 重々しい感じ	あー やっと狭くて暗い穴を抜けられた もう ぶつからないぞ あっ大きな象さんが現れました のっし のっし 歩いているぞ 長いお鼻をぶらぶらさせながら のっし のっし のっし のっし	あー やっと小さな穴を抜けられた みんな 立ち上がれ あっ いたぞ 大きな大きな象だ 足が重そうだな 片足を上げて うんとこしょ ドスン 止まって鼻を振っているぞ ブーーン ブーーン
④うさぎ	うさぎの形態や動き 軽快な感じ	あっ 今度はかわいいうさぎさんがやってきましたよ 元気に元気に跳ねています 大きな岩の上もピョンととびこえています お友達と競走しているみたい ピョンピョン ピョンピョン	あっ、今度はかわいいうさぎさんがやってきましたよ 高く高く跳んでいます 思いっきり高く 後ろ足でジャンプ 両足を揃えてジャンプ うーんと高くピョンピョン
⑤へび	へびの形態や動き 床に這う動き	たいへん 大きなへびが草むらから出てきました 毒へびかな 大きな大きなへびです こっちに向かってくるよ ゆっくりゆっくりこちらに進んできます きゃー なんだか噛みつかれそうです	たいへん 大きなへびが草むらから出てきました 太いからだをくねくねさせています 長いからだで地面を這っています くねくね くねくね あー 大きな口を開けて 噛みつかれそうだ
⑥ヘリコプター	ヘリコプターの形態や動き 回る動き	あー へびはいなくなりました いつのまにか夕方になってきました ヘリコプターが迎えにきました さあ プロペラをまわして ブルブルブルブル まわりだしたぞ 調子はいいか すごい速さだ ブルブルブルブル よーし出発だ ブルブルブルブル	あー へびはいなくなりました あれあれ みんな ヘリコプターが迎えにきたぞ さあ、プロペラをまわして 両手をうーんとひろげて ぐるぐるまわりだしたぞ 目が回りそうなほど はやくまわらなくちゃ ぐるぐるぐるぐる よーしオッケー
		あー やっと幼稚園に戻ってきたね 楽しかったね	

表2 身体表現を捉える観点

項目	具体的な観点	得点の基準
① イメージの独自さ	他の子どもが思いつかない独自の表現をしている	3: たいへん独特である 2: 他の子どもの模倣ではないが一般的である 1: 他の子どもの模倣である
② イメージの具体化	題材へのイメージを具体的に表現している	3: 明確なイメージをもってなりきって表現している 2: イメージを漠然ともってなりきろうとしている 1: イメージがもてず、なりきれていない
③ 動きの多様さ	動きの種類	3: 3種類以上の動きで表現している 2: 2種類の動きで表現している 1: 1種類以下の動きで表現している
④ 動きの変化	速度や方向を変化させたり、複合的な動きで表現したり、動きを繰り返したりしている	3: たいへんよくできている 2: まあまあできている 1: できていない
⑤ 動きの確かさ	表現したいと思う動きを、からだ全体や細部を使って意識的に行っている	3: たいへん意識的にできている 2: まあまあ意識的にできている 1: できていない

してVTRに収録した。また、この実験に先立ち、類似したテーマでクラス単位の身体表現の保育活動を2回実施し、子ども達に題材への動機づけを行った。

VTR収録時に対象児の動きが、他児と重なってみにくいという問題については、対象児に目印になるゼッケンをつけ、4台のVTRで収録することで解決を図った。しかしながら、対象児が他児の影響を受ける状況は否定できず、この点において本研究の限界が認められる。

④分析の方法

VTRに収録した身体表現は、表2に示した身体表現を捉える観点の項目について、各項目の基準に従って評価した。身体表現を捉える観点は、本研究において、各題材での幼児の身体表現を評価する視点として、「イメージ」の側面として1イメージの独自さ、2イメージの具体化の2項目、「動き」の側面として3動きの多様さ、4動きの変化 5動きの確かさの3項目を共通の尺度として作成した。

評価者は、幼児体育研究者、舞踊研究者、幼児教育研究者の3名である。

3名が評価した得点の平均値を対象児の得点とした。対象児は、同じ言葉がけ刺激で2回身体表現しているため、延べ6人の評価者の平均値となる。各題材において、性差、言葉がけの違いによる差、身体表現を捉える観点間の差があるかを知るために、統計解析ソフトStatViewを用いて、

2×2×5の分散分析を行い、その後Bonferroni/Dunnによる多重比較検定を行った。

Ⅲ 結果と考察

1 題材別にみられる身体表現の特徴

各題材の身体表現の特徴について、性差、刺激としての言葉がけの差、身体表現を捉える観点の差を中心に考察する。

(1) 題材「探検隊」の特徴

題材「探検隊」では、分散分析の結果、身体表現を捉える観点間に有意な差が認められ(F(4,280)=15.196, p<0.001 表3-1)、多重比較検定を行った結果、イメージの独自さと動きの多様さ、イメージの独自さと動きの変化、イメージの具体化と動きの多様さ、イメージの具体化と動きの変化、動きの多様さと動きの確かさ、動きの変化と動きの確かさの間に差があった(表3-2)。なかでも、図1にみられるように、男児では、B動きの要素を強調した言葉がけの動きの確かさが最も平均値が高く(M=1.79 SD=0.42)、女児では、B動きの要素を強調した言葉がけのイメージの具体化が最も平均得点が高かった(M=1.67 SD=0.47)。

題材「探検隊」で、主に行われた動きは男女ともに「歩く」であった。「歩く」動きによる表現は、5歳児において運動発達の能力が結果を左右するとは考えにくい⁵⁾。したがって、「探検隊、出発だ」という働きかけに対して、探検隊のイメージを優先させて他児と手を取りあったりして、なりきる

ことに興味を向けた女兒に対して、「歩く」動作をもとに、手を高く振り上げたり、歩幅を変えたりして動くことへの欲求を喚起された男児とのあいだの違いが差になったと推察される。

このような男女の感じ方の違いを、動きとイメージの相互作用とし、個人内の創造的思考のプロセスに留まらず、保育活動のなかで相互に作用させる方法を具体的に検討することが、次の課題と考えられる。

(2) 題材「狭くて暗い道」の特徴

題材「狭くて暗い道」では、言葉がけ間に有意な差がみられ ($F(1,280) = 18.415, p < 0.001$ 表4-1)、B動きの要素を強調した言葉がけが、Aイメージの内容を強調した言葉がけよりも平均値で0.21点高かった。(図2)

B動きの要素を強調した言葉がけでは、「できるだけ、からだを小さくして 頭をぶつけないように 手で地面を触って 頭を下げて」などの言葉によって、首を起し体幹を伸ばして床を這う運動が、頭を低くし首をすくめるようにしたり、肘をからだの前方に突き出すようにして前進したり、さらには仰向けになって手で天井をさぐるような動きへと変化する様子が観察できた。

この題材の特性を他の題材との違いからみると、象やうさぎのように具体的に模倣できる形態がなく、「狭くて暗い」感じを表現するために、そこを通る人の様子を通して、動きとして具象化するプロセスが必要ながわかる。したがって、B動きの要素を強調した言葉がけをすることによって、子ども達は、実際にその動きを試し、題材を自らの身体感覚で捉えたことで、イメージが具体化し、動きが確かになったと考察される。

また、身体表現を捉える観点についても、有意差が認められ ($F(4,280) = 20.009, p < 0.001$ 表4-1)、イメージの独自さと動きの多様さ、イメージの独自さと動きの変化、イメージの具体化と動きの多様さ、イメージの具体化と動きの変化、動きの多様さと動きの確かさ、動きの変化と動きの確かさの間に差があった(表4-2)。高い得点を示したのは、男児、女兒ともにB動きの要素を強調した言葉がけの場合のイメージの具体化と動きの確かさであり、同時に、動きの多様さの得点もB動きの要素を強調した言葉がけが、Aイメージの内

容を強調した言葉がけより高い得点を示していた。(図2)

身体表現におけるイメージとは、感覚されたものをもとにして、からだ全体で反応し、増幅、減少させていって、ある状況や形象を構築していくものである⁶⁾。したがって、「～になってみよう」、「～を想像してみよう」という課題に対して、子ども達が、漠然とした感じや、対象の属性を説明するだけの捉え方に傾いた場合、身体部位を意識することで動きを具現化するプロセスに導くことが必要と示唆される。身体や動きの感覚を通して、イメージを実感させる作用を促す援助が、自由な表現に向けて有効と思われる。

(3) 題材「象」の特徴

題材「象」では、分散分析の結果、身体表現を捉える観点間に有意な差が認められ ($F(4,280) = 16.571, p < 0.001$ 表5-1)、多重比較検定を行った結果、イメージの独自さと動きの多様さ、イメージの独自さと動きの変化、イメージの具体化と動きの多様さ、イメージの具体化と動きの変化、動きの多様さと動きの確かさ、動きの変化と動きの確かさの間に差があった(表5-2)。特に、イメージの具体化が、動きの多様さより平均で0.563点、動きの変化よりも0.542点高いことが認められた。

男児では、腕で鼻を表したり、左右の足をもちあげるように交互に動かして移動したり、泣き声を真似て歩き回ったりと、かなり個々には異なった動きがみられた。特にB動きの要素を強調した言葉がけでは、一瞬考える様子が見られた後、四つ這いの姿勢で、足を高くあげたり、全身で鼻を表現するようにからだを捻ったりといった動きが生まれ、表現したいことをより強調して表そうとする様子が観察された。このことは、動きの独自さの得点について、B動きの要素を強調した言葉がけ ($M=1.791$ $SD=0.514$) が、Aイメージの内容を強調した言葉がけ ($M=1.622$ $SD=0.485$) を上回っていることから裏付けられる。これはAイメージの内容を強調した言葉がけの「大きな大きな象さん」「のっしのっし」「ぶらぶら」のような決まり文句的な言葉の表現が、B動きの要素を強調した言葉がけではなくなったことで、より自由なイメージが広がり、自分の動きとして象を捉

表 3-1 題材「探検隊」の得点の分散分析

	SS	df	MS	F	P
a 性	0.810	1	0.81	4.237	0.0405
b 言葉がけ	0.319	1	0.319	1.671	0.1972
c 身体表現を捉える観点	11.623	4	2.906	15.196	<0.0001
a × b	0.031	1	0.031	0.164	0.6855
a × c	0.371	4	0.093	0.485	0.7465
b × c	0.089	4	0.022	0.117	0.9765
a × b × c	0.025	4	0.006	0.032	0.9980
誤差	53.543	280	0.191		

P<0.001

表 3-2 題材「探検隊」の得点の多重比較 (Bonferroni/Dunn)

要 因	平均値の差	棄却値	p 値
a 性 男児 — 女児	0.10	0.099	0.0405 S
b 言葉がけ A イメージ — B 動きの要素	-0.065	0.099	0.1972
c 身体表現を捉える観点			
① イメージの独自さ — ② イメージの具体化	-0.125	0.226	0.1190
① イメージの独自さ — ③ 動きの多様さ	0.269	0.226	0.0008 S
① イメージの独自さ — ④ 動きの変化	0.352	0.226	<0.0001
① イメージの独自さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.108	0.226	0.1759
② イメージの具体化 — ③ 動きの多様さ	0.394	0.226	<0.0001 S
② イメージの具体化 — ④ 動きの変化	0.477	0.226	<0.0001 S
② イメージの具体化 — ⑤ 動きの確かさ	0.016	0.226	0.8364
③ 動きの多様さ — ④ 動きの変化	0.083	0.226	0.3004
③ 動きの多様さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.378	0.226	<0.0001 S
④ 動きの変化 — ⑤ 動きの確かさ	-0.460	0.226	<0.0001 S

有意水準：5% p 値<0.005

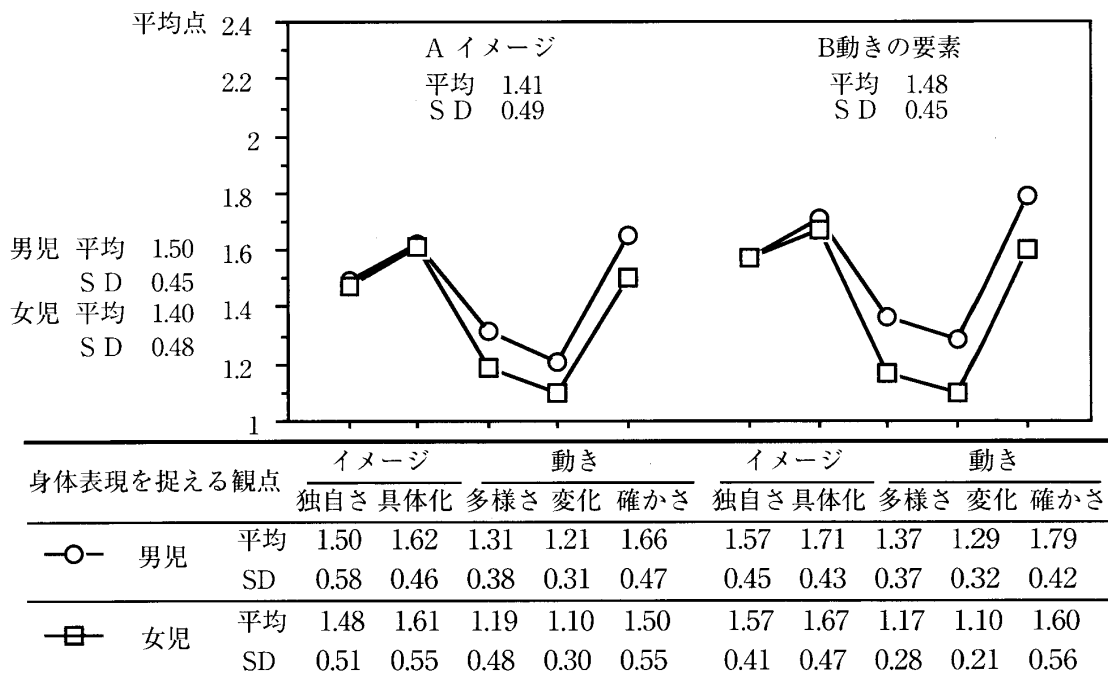


図 1 題材「探検隊」の平均点

幼児の身体表現におけるイメージと動きの相互作用

表 4-1 題材「狭くて暗い道」の得点の分散分析

	SS	df	MS	F	P
a 性	5.633	1	5.633	3.064	0.986
b 言葉がけ	3.381	1	3.381	18.415	<0.0001
c 身体表現を捉える観点	14.696	4	3.674	20.009	<0.0001
a × b	0.439	1	0.439	2.388	0.1234
a × c	0.158	4	0.039	0.215	0.9300
b × c	0.442	4	0.111	0.602	0.6612
a × b × c	0.079	4	0.020	0.107	0.9800
誤差	54.414	280	0.184		

P<0.001

表 4-2 題材「狭くて暗い道」の得点の多重比較 (Bonferroni/Dunn)

要 因	平均値の差	棄却値	p 値
a 性 男児 — 女児	0.00	0.097	0.986
b 言葉がけ A イメージ — B 動きの要素	-0.212	0.097	<0.0001 S
c 身体表現を捉える観点			
① イメージの独自さ — ② イメージの具体化	-0.200	0.221	0.0111
① イメージの独自さ — ③ 動きの多様さ	-0.222	0.221	0.0049 S
① イメージの独自さ — ④ 動きの変化	0.386	0.221	<0.0001 S
① イメージの独自さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.145	0.221	0.0658
② イメージの具体化 — ③ 動きの多様さ	0.422	0.221	<0.0001 S
② イメージの具体化 — ④ 動きの変化	0.586	0.221	<0.0001 S
② イメージの具体化 — ⑤ 動きの確かさ	0.055	0.221	0.4787
③ 動きの多様さ — ④ 動きの変化	0.164	0.221	0.0370
③ 動きの多様さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.366	0.221	<0.0001 S
④ 動きの変化 — ⑤ 動きの確かさ	-0.580	0.221	<0.0001 S

有意水準：5% p 値 <0.005

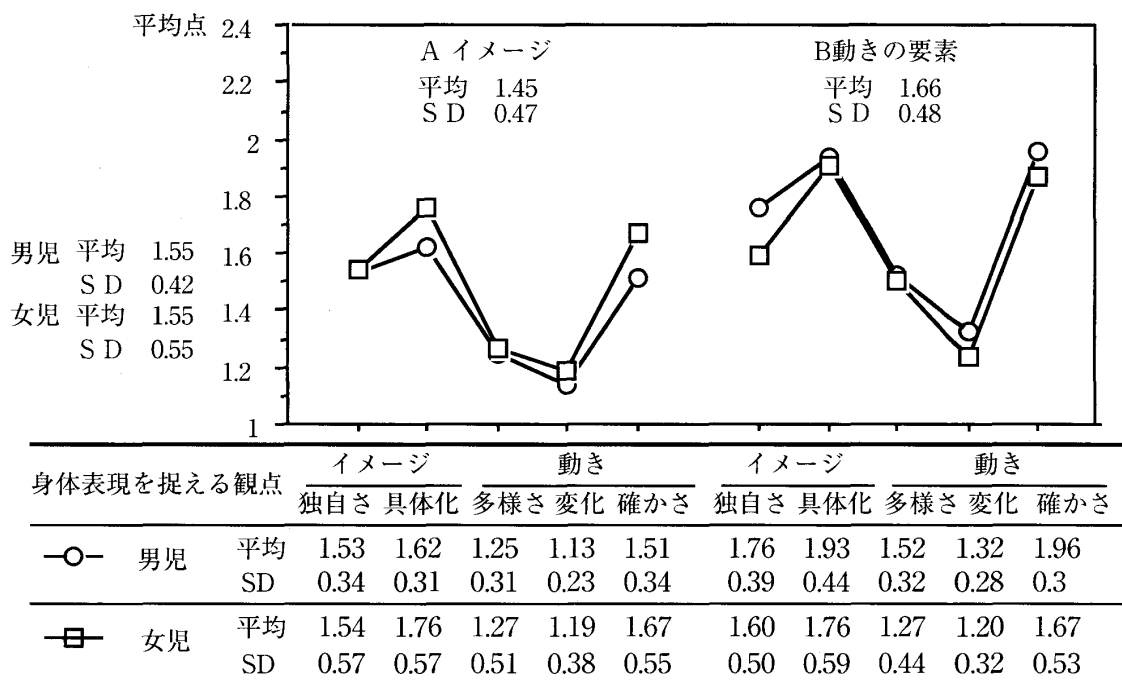


図 2 題材「狭くて暗い道」の平均点

表 5-1 題材「象」の得点の分散分析

	SS	df	MS	F	P
a 性	0.075	1	0.075	0.307	0.5802
b 言葉がけ	0.194	1	0.194	0.791	0.3745
c 身体表現を捉える観点	16.257	4	4.064	16.571	<0.0001
a × b	0.065	1	0.065	0.267	0.6060
a × c	0.146	4	0.037	0.149	0.9634
b × c	0.193	4	0.048	0.196	0.9401
a × b × c	0.032	4	0.008	0.032	0.9980
誤差	68.677	280	0.245		

P<0.001

表 5-2 題材「象」の得点の多重比較 (Bonferroni/Dunn)

要 因	平均値の差	棄却値	p 値
a 性 男児 — 女児	0.03	0.113	0.5802
b 言葉がけ A イメージ — B 動きの要素	-0.051	0.113	0.3745
c 身体表現を捉える観点			
① イメージの独自さ — ② イメージの具体化	-0.197	0.256	0.0303
① イメージの独自さ — ③ 動きの多様さ	0.366	0.256	<0.0001 S
① イメージの独自さ — ④ 動きの変化	0.345	0.256	0.0002 S
① イメージの独自さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.109	0.256	0.2312
② イメージの具体化 — ③ 動きの多様さ	0.563	0.256	<0.0001 S
② イメージの具体化 — ④ 動きの変化	0.542	0.256	<0.0001 S
② イメージの具体化 — ⑤ 動きの確かさ	0.088	0.256	0.3295
③ 動きの多様さ — ④ 動きの変化	-0.021	0.256	0.8137
③ 動きの多様さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.475	0.256	<0.0001 S
④ 動きの変化 — ⑤ 動きの確かさ	-0.454	0.256	<0.0001 S

有意水準：5% p 値 <0.005

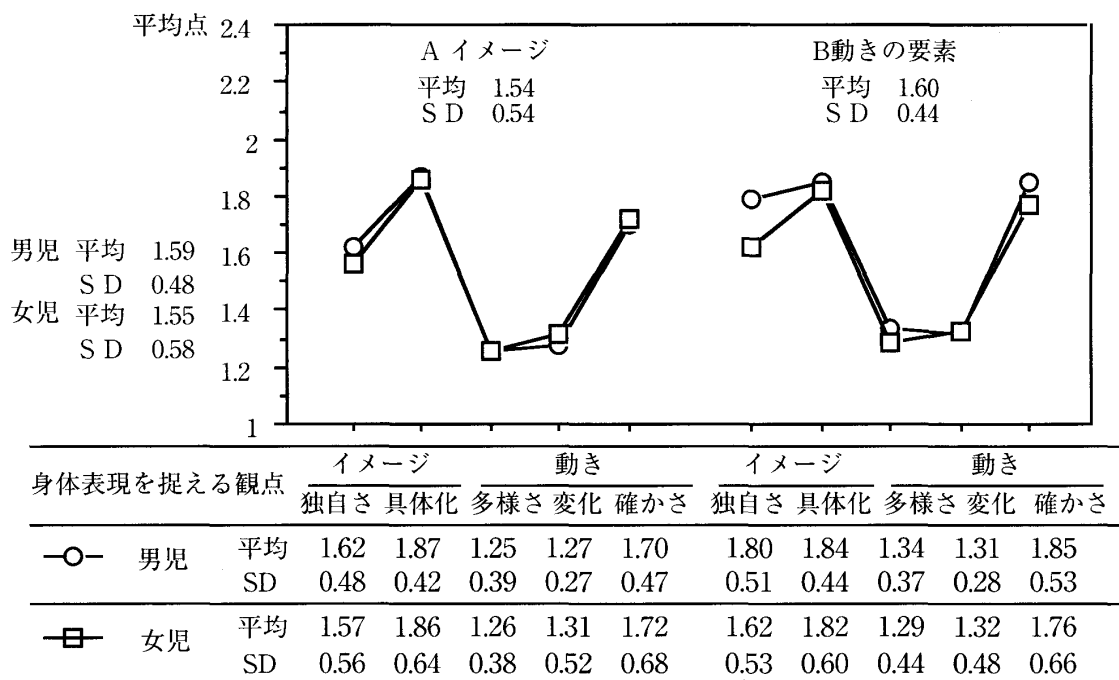


図 3 題材「象」の平均点

幼児の身体表現におけるイメージと動きの相互作用

表 6-1 題材「うさぎ」の得点の分散分析

	SS	df	MS	F	P
a 性	2.649	1	2.679	15.632	<0.0001
b 言葉がけ	0.753	1	0.753	4.394	0.0370
c 身体表現を捉える観点	21.052	4	5.263	30.709	<0.0001
a × b	0.286	1	0.286	1.671	0.1971
a × c	2.391	4	0.598	3.488	0.0084
b × c	0.158	4	0.040	0.231	0.9210
a × b × c	0.118	4	0.030	0.171	0.9525
誤差	47.987	280	0.171		

P<0.001

表 6-2 題材「うさぎ」の得点の多重比較 (Bonferroni/Dunn)

要 因	平均値の差	棄却値	p 値		
a 性 男児 — 女児	-0.489	0.094	<0.0001	S	
b 言葉がけ A イメージ — B 動きの要素	-0.100	0.094	0.0370	S	
c 身体表現を捉える観点	① イメージの独自さ — ② イメージの具体化	-0.208	0.214	0.0063	
	① イメージの独自さ — ③ 動きの多様さ	0.361	0.214	<0.0001	S
	① イメージの独自さ — ④ 動きの変化	0.464	0.214	<0.0001	S
	① イメージの独自さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.113	0.214	0.1343	
	② イメージの具体化 — ③ 動きの多様さ	0.569	0.214	<0.0001	S
	② イメージの具体化 — ④ 動きの変化	0.672	0.214	<0.0001	S
	② イメージの具体化 — ⑤ 動きの確かさ	0.095	0.214	0.2114	
	③ 動きの多様さ — ④ 動きの変化	0.103	0.214	0.1734	
	③ 動きの多様さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.474	0.214	<0.0001	S
	④ 動きの変化 — ⑤ 動きの確かさ	-0.577	0.214	<0.0001	S

有意水準：5% p 値 <0.005

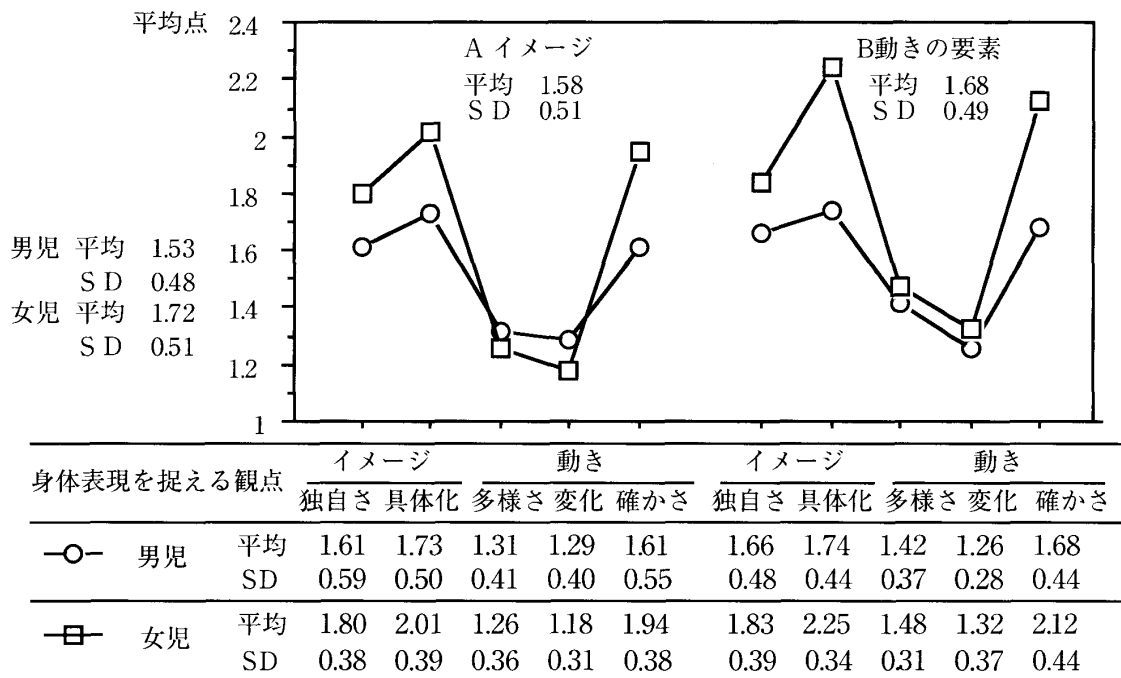


図 4 題材「うさぎ」の平均点

表 7-1 題材「へび」の得点の分散分析

	SS	df	MS	F	P
a 性	0.001	1	0.001	0.006	0.9382
b 言葉がけ	1.635	1	1.635	10.507	0.0013
c 身体表現を捉える観点	12.155	4	3.039	19.524	<0.0001
a × b	0.139	1	0.139	0.891	0.3460
a × c	0.29	4	0.073	0.467	0.7603
b × c	0.151	4	0.038	0.243	0.9138
a × b × c	0.025	4	0.006	0.041	0.9969
誤差	48.58	280	0.156		

P<0.001

表 7-2 題材「へび」の得点の多重比較 (Bonferroni/Dunn)

要 因	平均値の差	棄却値	p 値	
a 性 男児 — 女児	-0.009	0.09	0.8463	
b 言葉がけ A イメージ — B 動きの要素	-0.122	0.09	0.0080 S	
c 身体表現を捉える観点	① イメージの独自さ — ② イメージの具体化	-0.184	0.204	0.0115
	① イメージの独自さ — ③ 動きの多様さ	0.299	0.204	<0.0001 S
	① イメージの独自さ — ④ 動きの変化	0.353	0.204	<0.0001 S
	① イメージの独自さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.084	0.204	0.2461
	② イメージの具体化 — ③ 動きの多様さ	0.483	0.204	<0.0001 S
	② イメージの具体化 — ④ 動きの変化	0.537	0.204	<0.0001 S
	② イメージの具体化 — ⑤ 動きの確かさ	0.100	0.204	0.1683
	③ 動きの多様さ — ④ 動きの変化	0.054	0.204	0.4584
	③ 動きの多様さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.383	0.204	<0.0001 S
	④ 動きの変化 — ⑤ 動きの確かさ	-0.437	0.204	<0.0001 S

有意水準：5% p 値 <0.005

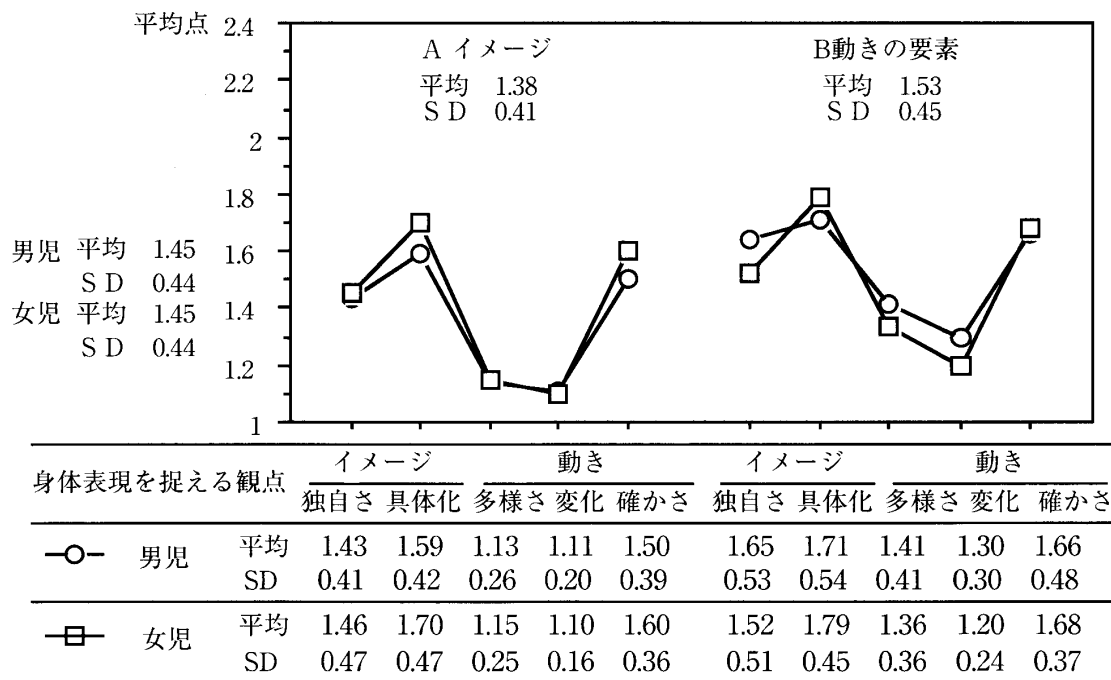


図 5 題材「へび」の平均点

幼児の身体表現におけるイメージと動きの相互作用

表 8-1 題材「ヘリコプター」の得点の分散分析

	SS	df	MS	F	P
a 性	0.271	1	0.271	1.776	0.1838
b 言葉がけ	0.508	1	0.508	3.336	0.0688
c 身体表現を捉える観点	23.326	4	5.832	38.263	<0.0001
a × b	0.540	1	0.540	3.544	0.0608
a × c	0.194	4	0.049	0.319	0.8654
b × c	0.055	4	0.014	0.091	0.9854
a × b × c	0.056	4	0.093	0.093	0.9848
誤差	42.674	280	0.152		

P<0.001

表 8-2 題材「ヘリコプター」の得点の多重比較 (Bonferroni/Dunn)

要 因	平均値の差	棄却値	p 値
a 性 男児 — 女児	-0.060	0.089	0.1839
b 言葉がけ A イメージ — B 動きの要素	-0.122	0.089	0.0688
c 身体表現を捉える観点			
① イメージの独自さ — ② イメージの具体化	-0.203	0.202	0.0048 S
① イメージの独自さ — ③ 動きの多様さ	0.433	0.202	<0.0001 S
① イメージの独自さ — ④ 動きの変化	0.456	0.202	<0.0001 S
① イメージの独自さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.125	0.202	0.0806
② イメージの具体化 — ③ 動きの多様さ	0.635	0.202	<0.0001 S
② イメージの具体化 — ④ 動きの変化	0.658	0.202	<0.0001 S
② イメージの具体化 — ⑤ 動きの確かさ	0.078	0.202	0.2768
③ 動きの多様さ — ④ 動きの変化	0.023	0.202	0.7489
③ 動きの多様さ — ⑤ 動きの確かさ	-0.558	0.202	<0.0001 S
④ 動きの変化 — ⑤ 動きの確かさ	-0.581	0.202	<0.0001 S

有意水準：5% p 値 <0.005

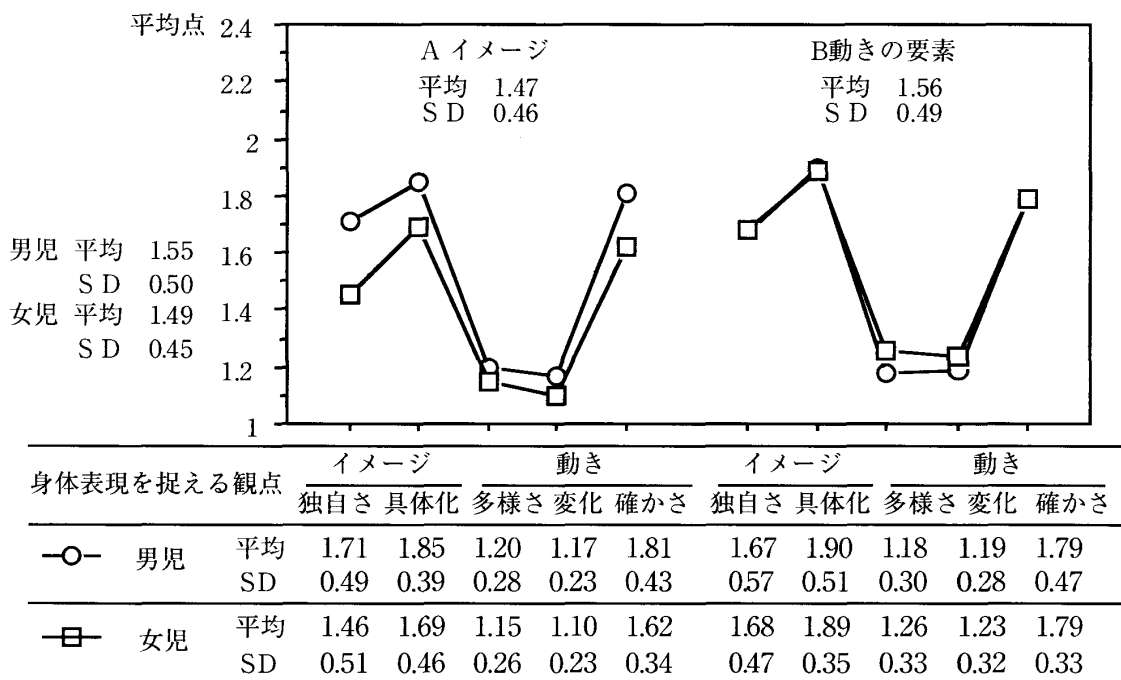


図 6 題材「ヘリコプター」の平均点

えられたのではないかと推察される。しかし、ほとんどの子どもが、同じ運動を続けており、意識的にその動きを繰り返してリズムパターンを作ったり、別の動きへと発展する子どもは僅かであった。

また、女兒では、動き始めの段階で、周囲を見回し、特定の子どもの動きを模倣して動き出す様子が多く観察された。イメージの具体化や動きの確かさの得点の標準偏差が大きく、個人差が大きいことから裏づけられる。(イメージの具体化／言葉がけ A:SD=0.64、言葉がけ B:SD=0.53) (動きの確かさ／言葉がけ A:SD=0.68、言葉がけ B:SD=0.66) 図3

これらのことより、筆者には、「象」という題材は、子ども達にとって「身近か」で「実感として」捉えやすいのかという問題意識が生じた。独自の形態や独特な動きを持ち、保育者が取り上げやすい題材ではある。反面、「自分なりの経験」や「感じ方」以前に、この年代の子どもでさえ、象について様々な経路から獲得している情報が多く、「こうすることがよいこと」とか、「こうしなければならぬのでは」という規範的な意識が先行しやすい題材であると捉えられた。従って保育者は、この点のある程度払拭し、「自分なりの感じ方」や「表し方」を促す働きかけを検討する必要があると思われる。知識というものが、実体験の上に積み上げられてこそ、美的価値観が形成されることが示唆される。

(4) 題材「うさぎ」の特徴

題材「うさぎ」では、性別に有意な差がみられ ($F(1,280)=15.632, p<0.001$ 表6-1)、女兒が、男児より平均で0.189点高かった。(表6-2) (男児: $M=1.530$ $SD=0.476$ 女兒: $M=1.719$ $SD=0.512$)

また、身体表現を捉える観点間にも有意な差が認められ ($F(4,280)=30.709, p<0.001$ 表6-1)、多重比較検定を行った結果、イメージの独自さと動きの多様さ、イメージの独自さと動きの変化、イメージの具体化と動きの多様さ、イメージの具体化と動きの変化、動きの多様さと動きの確かさ、動きの変化と動きの確かさの間に差があった(表6-2)。

女兒においては、B動きの要素を強調した言葉がけでのイメージの具体化が最も高得点 ($M=2.25$ $SD=0.34$ 図4)であり、6つの題材の

すべての観点を通じて最も高い得点を示していた。また、Aイメージの内容を強調した言葉がけでの動きの変化が最も低い得点であった ($M=1.18$ $SD=0.31$ 図4)。

ほとんどの女兒は、「うさぎさん」と聞いた途端に、たいへん嬉しそうに両手または両腕で耳をつくり、両足で跳ぶ動きを始めていた。多くの女兒が類似した動きであったが、題材「象」で、他児の動きを確認してから、特定の子の動きを模倣するように動き始めていた様子とは、全く異なっていた。それぞれが、「うさぎ」になることを楽しんでいるようであった。また、B動きの要素を強調した言葉がけで、「思いつき高く、後ろ足でジャンプ」などに反応して、膝を意識的に曲げてジャンプし、その新たな動きの感じを楽しむように繰り返す様子が観察された。こういった様子は、「気持ちよこめて」とか、「自由に」と語るまえに、「表現 (representation) = 再現・表象」が「表出 (expression)」として成立するところに、もっと教育は目をむけていいと思う⁷⁾ という考え方を支持できる側面と思われる。

(5) 題材「へび」の特徴

題材「へび」では、分散分析において、身体表現を捉える観点間に有意な差が認められ ($F(4,280)=19.524, p<0.001$ 表7-1)、多重比較検定を行った結果、イメージの独自さと動きの多様さ、イメージの独自さと動きの変化、イメージの具体化と動きの多様さ、イメージの具体化と動きの変化、動きの多様さと動きの確かさ、動きの変化と動きの確かさの間に差があった(表7-2)。

また、B動きの要素を強調した言葉がけがAイメージの内容を強調した言葉がけよりも平均値で1.22点高いことが認められた(表7-2)。特に男児では、B動きの要素を強調した言葉がけをみると、Aイメージの内容を強調した言葉がけよりも、動きの多様さや動きの変化の得点が高かった(図5)。

「へび」では、ほとんどの子どもが床に腹ばいになっており、途中で動きを大きく変化させる子は少なかった。しかし、B動きの要素を強調した言葉がけで、「からだをくねくねさせています」や「大きな口で噛みつかれそう」に反応して、前進を捻らせたり、両腕を口に見立てて近くの子どもに

喃みつく表現がみられ、イメージが具体化する様子がみられた。もっとも、動きのリズムとして特徴的なものは少なく、ゆっくりと伸びる、ゆっくり縮むといった漸次的な変化をもつ動きの表現はみられなかった。

従って、この段階の子ども達の表現運動をより多様にする側面として、運動に漸次的な変化をつけることができるような働きかけを検討する必要性が示唆された。

(6) 題材「ヘリコプター」の特徴

題材「ヘリコプター」では、分散分析において、身体表現を捉える観点間に有意な差が認められ (F(4,280)=38.263, $p<0.001$ 表8-1)、多重比較検定を行った結果、イメージの独自さとイメージの具体化、イメージの独自さと動きの多様さ、イメージの独自さと動きの変化、イメージの具体化と動きの多様さ、イメージの具体化と動きの変化、動きの多様さと動きの確かさ、動きの変化と動きの確かさの間に差があった(表8-2)。

イメージの独自さとイメージの具体化の差は、6題材中、「ヘリコプター」の題材でのみ認められた。平均値で0.203点、イメージの具体化が高い得点を示していた。(表8-2)「ヘリコプター」では、一部の子どもで、両腕を頭上に上げて、手首を合せて指でプロペラを表すような動きを試みていたり、速度の緩急や身体の高さの高低をつけて走り回っている様子が観察できたが、ほとんどの子どもは両腕を広げて自転する動きを行っていた。個々には、その動きを楽しみ、十分な満足感をもって行っているように観察できたが、イメージとして独自とは評価できなかったことが、この結果をもたらしたと考察される。

しかしながら一方で、子ども達が、自分自身が動いている快感と同時に、「ぐるぐる回る」動きを皆が同じように行っているダイナミックな状況を視覚的に楽しむ様子もみられた。この期の子どもが、活動的で動的な美しさにひかれ、そういった動的な態勢の中で心の充実度を高めている⁸⁾のであれば、このような満足感についても、表現することの楽しみを味わい、新たな題材や動きに挑戦しようという意欲を生む側面として、認めていくべきだと考えられた。

2 身体表現を捉える観点からみた5歳児の身体表現能力の特徴

今回の研究で扱った6つの題材では、いずれも身体表現を捉える観点間に有意な差が認められた。いずれの題材でも、動きの多様さと動きの変化の項目は、イメージの具体化、動きの確かさの項目に比べて平均得点が有意に低かった。(6題材すべての平均点:イメージの独自さ $M=1.61$ $SD=0.48$ イメージの具体化 $M=1.68$ $SD=0.45$ 動きの多様さ $M=1.28$ $SD=0.38$ 動きの変化 $M=1.22$ $SD=0.31$ 動きの確かさ $M=1.72$ $SD=0.47$)

動きの多様さは、動きの種類で評価したが、6題材での平均は、1.28点であり、多くの子どもが、単一の運動の反復であった。2種類以上の運動を行った子どもは、始めに行った運動に、歩く、走る、這うなどの移動運動が加わるパターンや、ストーリーを想像しながら動きをつくり出すパターン、例えば、「狭くて暗い道」で頭をぶつけた様子を表すといった流れが観察された。

動きの変化は、動きの速度の変化、複合的な動きでの表現、リズムパターンをもった動きの繰り返しなどの要素を、意識的に行っているかで評価した。6題材の平均は1.22点で5つの観点のなかで最も低かった。先行研究⁹⁾においても、「変化のある動きができる」ことや「部分と全身を使った動きができる」ことは、5歳児にとって、やや難度の高い表現方法であるという結果が得られており、今回の結果と一致する。

上記の2項目、動きの多様さと動きの変化の得点を上昇させることにより、子ども達の表現はどのように変容するのであろうか。先行研究では、2種類以上の複合的運動の反復、2、3種類の一連の運動や、連続した2種類の運動の反復などにより、動きの空間が広がり、リズムカルになり、更にダイナミックな動きになり、『より感じをとらえた一人ひとりの個性的な動き』の感が強くなる¹⁰⁾ことや、複合した動きやリズム・テンポを変化させて動けるようになるのと同時期に、形式的・概念的でなく個性的表現が多くなる¹¹⁾ことが報告されている。つまり、身体表現において「自由に表現できる」力をもつためには、「身体育て」¹²⁾が必要なのである。「身体育て」は、自分がどんなことができるのか、どんな動きができるのか、

そしてその時、どんな気持ちがするのかをたくさん体験することにより、イメージと動きが連合し、題材にふさわしい豊かな表現ができるようになるとともに、身体感情も生き生きとしてくる営み¹³⁾である。この理念は、ややもすると表現が内面的なもの表れであるという理解に反するものであって、動きを育てることは技能中心の指導となり、子どもの表現を規定することになるとの曲解を招いている部分でもある。

表現という活動が、子どもの年齢に即してどういう育ち方をするのか、経験をどのように積み上げていくのが大事なのかという発達の視点が欠如しているという問題¹⁴⁾に照らし、改めて身体表現の特性である「動き」の発達との相互作用に目を向ける必要があると考えられる。

IV まとめ

本研究では、幼児の身体表現におけるイメージと動きの相互作用を促す方法を検討する手がかりとして、題材や言葉がけの違いによって表現がどのように異なっているのかを知るための実験を行った。

その際、各題材での身体表現を捉える観点として5つの項目を共通尺度として設定した。その観点から、5歳児の身体表現の特徴として、表現対象になりきるといった、イメージを具体化する力や、動きの確かさの項目にみられる自分の思うようからだを動かすといった力よりも、独自のイメージをもち、多様な動きや変化のある動きで表現することの方が獲得されにくい能力であることが示唆された。

ただし今回の実験の対象は、身体表現活動の経験の程度が浅く、低年齢時からの積み上げのない5歳児であるという背景を押さえる必要がある。従って、本研究の対象児は、身体表現に関する発達としては初期的段階であり、本研究の結果は、初期的な援助の方法に還元されると考えられる。

今回の実験からは、5歳児の初期の段階では、表現の対象に対しての言語的なイメージの内容を強調する言葉がけよりも、動きの要素を強調する言葉がけを用いる方が、イメージを具体的にさせるのに有効であるとの結果が得られた。

さらに、そのための具体的な方法が、以下のよ

うにまとめられた。

- 1) 形態的な模倣がしにくい題材やパントマイム的な動きが予想される題材では、自分のからだや動きで感覚的に捉えさせることがイメージを具体化させることに繋がるため、動きの要素を強調した言葉がけが有効になる。
- 2) 多くの子どもが共通に抱くイメージは、一人ひとりが実感としてもつイメージではなく、メディアをはじめとして様々な経路から得た知識である場合が多い。動きについても、特に女兒の場合には規範的な意識が強い。こういった傾向の強い題材の場合には、対象へのイメージを言語的に想起させるよりも、動きで実感させることが自分なりの表し方に気付かせる援助になる。
- 3) 身体表現は、表現する主体と客体が同一であるという特性をもつため、特に幼児期の表現は、子ども自身が動くことから生まれる表出的な部分に、もっと目を向けていくべきだと考えられる。
- 4) 動きの発達の側面として、この期の子ども達に対して、運動を漸次的に変化させる感覚に気付かせるような言葉がけが、対象へのイメージをより膨らませる援助になる。
- 5) 多くの子ども達と同時に動く空間のダイナミックさを、子ども自身が視覚的に捉えることは、心の充足度を高め、表現する意欲へと結びつく要因になる。
- 6) イメージと動きの相互作用を個人内の思考のプロセスとして捉えるだけでなく、共同の活動での関わりに活かす具体的な方法を検討することも重要であり、今後の課題である。

V おわりに

平成10年度の幼稚園教育要領の改訂により、表現の領域は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」領域と位置付けられた。新しい提案は、「自分なりに」表現することを通して「表現する力」を養うとした点である。

「自分なりに」とは、「個性」や「自己表現」という語に置き換えられ、「表現する力を養う」と

は、「表現の教育」を超えて「表現者の教育」へとねらいを置くと解釈できるのではないか¹⁵⁾。「自分なりに」は、あくまでも「表現者」である子ども側に掛かる言葉であって、援助する側には、より細やかで確かな視点が要求されると考えねばならない。

身体表現の領域においても、自由で自分らしい表現のできる子ども達の力を育てるための理念理解の拡充とともに、理念と一体化した方法の検討が積み重ねられねばならない。

引用・参考文献

- 1) 舞踊教育研究会(代表・片岡康子) 舞踊学講義 大修館書店 1991 p63
- 2) G. Dimondstein 加藤橘夫監修 子どものためのダンス授業 ベースボール・マガジン社 1981 p217
- 3) 黒川建一・高杉自子 保育内容／表現 ミネルヴァ書房 1990 p152
- 4) 第1回保育の実践と理論を考える会における小川博久氏の講演(1999.8.9)
- 5) ロバートM・マリーナ クロード・ブジャーラ 高石昌弘 小林寛道監訳 発育・成熟・運動 大修館書店 1995 pp151-152
- 6) 石福雄康 からだとことばのイメージ 青雲書房 1982 p16
- 7) 佐藤学 学びの身体技法 太郎次郎社 1997 p46
- 8) 阿部初代 幼児の身体表現 清水印刷 1985 p43
- 9) 金子直子 松本富子 鈴木武文 5～6歳児における身体表現の特徴と感覚運動能力・創造的能力との関係について 舞踊学第21号 1998 pp14-pp20
- 10) 若松美恵子 5歳児の身体表現の発達 白梅学園短期大学紀要第26号 1990 pp69-80
- 11) 前掲書8) p79
- 12) 前掲書7) p44
- 13) 柴真理子 身体表現 東京書籍 1981 p198
- 14) 大場牧夫 表現原論 萌文書林 1996 pp145-150
- 15) 佐伯胖・藤田英典・佐藤学編 表現者として育つ 東京大学出版会 1995 pp221-238

謝辞

協力いただきました名古屋柳城短期大学附属豊田幼稚園の子どもたちと先生方に深く感謝いたします。